

最優秀賞

真昼の星空

千葉・木更津工業高等専門学校 一年

橋本 沙羅

わたしの勤めている青柳出版業務課は、オフィスビルの最西端にあり、他の課とはしきりによって物理的に隔離されている。

こんなへんぴな場所にあるせいか、一緒に作業をするメンバーも中々粒揃いだ。例えばわたしの前の席の水戸さんは美女なのにサボテンを愛しているし、その隣の佐々木くんは同期でいい歳しているのにピチピチ服が好きである。彼の隣のこれまた美男はオカルト好きで、水晶玉が机の上に鎮座している芦屋さん、その前には若く、この世に妖精がいると信じている「電波女」の春日さんがいる。

そしてわたしの隣が、一番の問題児である。斎藤アジャンタ。曰く、インド人と日本人のハーフで、帰国子女。真偽のほどはわからないが、少なくともわたしは信じていなかった。

彼はお菓子が好きで、いつ見ても作業の合間合間に何かをつまんでいる。今日も例に違わず、固そうなアメリカ産のグミを咀嚼しながら、アジャンタはキーボードを叩いていた。

すると、「電波女」春日さんが、憂いを含んだ甘い声でつぶやいた。

「わたし、鳥になりたいわ。鳥になれば、誰の目も気にせずに妖精さんと遊べるのに」

「鳥といえば、この間行ったシンガポールで飛んでいたカモメがとっても綺麗でしたよ」

流暢な日本語を操りながら、編み込んだ黒髪を揺らしてアジャンタが笑う。芦屋さんはくすくすと含み笑いをしながら、「また例の旅行？」と茶化すように言った。

アジャンタの妄想癖の中でも、一番反応に困るのがこの「旅行」だ。一日では行けない距離の国や地域の話を、まるで昨日行ったばかりのように語る。実際、昨日は「フランスの凱旋門に行ってきたんですが、意外と大きくて驚きました」、一昨日は「ペルーのマチュピチュを見て来ましたよ。素晴らしくて涙が出ちゃいました」。

わたしは立ち上がると、コンビニ弁当と保冷材の入ったビニール袋を引っつかんだ。財布がポケットに入っているのを確認して、業務課から他の課に繋がる扉へと急いだ。

階段で一番下までほとんど走るように降りる。外の空気が肺に流れ込んだときには、心底ほっとした。会社員専用のカフェテラスに入ると、見知った顔がにこにこ手を振っている。課は違うが、入社説明会で気が合って仲良くなった持田という同い年の男性だ。

「お疲れ、菅野。なんか頼むか？」

「コンビニのお弁当あるから。……あ、でも、オレンジジュース頼もうかな」

わたしがそう言うと、持田は近くを通った店員を呼び止めて注文をしてくれた。インゲンのごま和えをほおばりながら、その光景を見ていた。懐かしい味がした。

「大変そうだな。またあの変人達か？」

「うん、まあ……。アジャンタ、今日はシンガポールに行ったんだって」

持田は体を揺らして豪快に笑った。わたしもつられて笑う。ひとしきり笑った後、箸にはさんでいたきんぴらの煮物を口に放った。

「アジャンタはなあ……。あの妄想癖さえ無ければ、仕事もてきぱきこ

なすし、良い奴なんだけど」

わたしもそう思う、という言葉を楽しみ下す。丁度ウェイトレスが運んできたオレンジジュースを流し込んで、紙ナプキンで口を拭いた。

「ここだけの話だけど、俺一回、あいつの旅に付き合ったことがあるんだ」

「えっ、本当？ どうやって？」

「どうもこうも、やってみればわかる。あいつは真性の妄想癖だよ」

持田がまた笑う。わたしは笑えなかった。

食べ終わった後のプラスチック容器や割り箸を一緒くたにしてビニール袋に放り込み、口を縛る。持田が一瞬眉をしかめた。わたしは見えて見ぬふりをして、公園にあるような鉄製のゴミ箱にそれを投げ捨てた。机の上にオレンジジュースの代金を置いて、わたしはぽかんとしたままの持田を尻目にビルの入口へと歩き出した。

わたしが業務課の扉を開けると、中には二人いて、息も荒く駆け込んできたわたしを啞然と見つめていた。佐々木さんとアジャンタだ。わたしが呼ぶと、アジャンタはおずおずと進み出た。廊下に出て、わたしはアジャンタに詰めよった。

「アジャンタ、わたしも旅行に連れて行って」

彼は一瞬呆気に取られた顔をしたが、すぐに笑顔になって、「わかりました」と承諾する。ふいにアジャンタが歩き出したので、わたしも後に続いた。

歩みを進めるうちに、まだ来たことのなかった見知らぬ通路にいることに気づいた。少し不安になってアジャンタに声をかけようとする、一つのドアの前でその歩みが止まった。

使われていない古い倉庫だ。アジャンタはあまり似合わないスーツのポケットから小さな鍵を取り出して、扉に付いていた南京錠を開けた。そして何事もなく中に入ってゆく。

それにとくと、中は真っ暗で何も見えない。アジャンタが何かのスイッ

チを入れる音がした。同時に、倉庫のせまい壁一面に夜空が出現した。プラネタリウムだ。

「菅野さん、こっちへ」

声のする方向へ手探りで歩いて行くと、アジャンタの腕に触れた。アジャンタが手を差し伸べてきたので、わたしはそれをつかみ、わたし達は手を繋いだ。

どことなく気恥ずかしかったが、不思議と嫌な感じはしなかった。

「では、行きます。目を閉じてください」

言われるがままに、わたしは目を閉じた。

「どこか行きたい所は？」

「どこでもいい」

「じゃあ、タイの市場にしましょう。活気があって、いい所ですから……」

アジャンタがそう言うのと、ふいに遠くから市場の喧騒が聞こえてきたような気がした。

「想像して下さい。照り付ける太陽と、お祭りの屋台のような出店が両脇に立ち並んでいます。走り回る子供達と、真っ青な快晴」

もう気のせいではない。わたしはゆっくり目を開けた。暗闇に慣れた目に光が痛かった。ここはもうオフィスビルの冴えない倉庫などではない。あまりにリアルなタイの町だった。

アジャンタを見ると、にっこり笑ってわたしを見つめていた。少々引きつってはいただろうが、わたしも笑い返した。太陽の光の熱ささえ感じられる。ここは真正銘、現実だ。

「空が綺麗でしょう」

そう言われ、上を見上げる。まともに空を見たのは何ヶ月ぶりだろう。「東京の空はビルが立ち並んでいて、少し不安になりますから、僕はたまにこうやって空を眺めているんですよ」

わたしはひたすら感銘を受けながら、彼の手を強く握った。やっと絞

り出した一言は、「帰ろう」という消極的な物だった。

目をつぶって、一步踏み出すと、たちまち市場の騒ぎ声も光の熱さも霧散してしまった。

少しばかり残念に思いながらも、わたしは倉庫の扉を開けて、アジャンタが出てくるのを待った。彼は倉庫から出ると、すぐさま南京錠をはめ直した。彼はわたしに笑いかける。その柔和な笑みを湛えているのは、妄想癖があつて変人の斎藤アジャンタではなかった。不思議な魔法を使うことができる、斎藤アジャンタという一人の人だった。

アジャンタと一緒にタイに旅行したことで、わたしはかなり世界観が変わったと思う。

重い荷物を背負つて歩く行商人や、無邪気にはしゃぐ異国の子供達を見ていると、業務課の彼らを「変人」と十把一絡げにして、個人の良いところを探そうとしなかったのが、どうしようもなく重い罪のように感じた。

だから、良い所を探そうと思った。

わたしの勤める青柳出版業務課は、オフィスビルの最西端にある。しかし窓の外にはコンクリートの高いビル壁がそびえていて、空はおろか、夕日の光をちらりと見ることすら叶わない。

そんなへんぴな場所にあるからか、業務課のメンバーは個人の考えを大切にしている。例えば、自然を愛するエコロジー主義の水戸さん、子供心を忘れずに新鮮な目線で物事を見ることが出来る佐々木くん。神秘的な存在感のある芦屋さん。夢があつて、未来に希望を持っている春日さん。不思議な力を持つ、仕事場のムードメーカー、斎藤アジャンタ。わたしが彼らのためにしてあげられることは少ないけれど、少なくとも理解することはできる。だから、わたしは今日も出版社の階段を上ってゆくのだ。

今度「旅行」に行くときは、アジャンタの故郷に行つてみたいな、な

どと笑いながら考え、わたしは目当ての業務課のドアノブに手をかけた。

優秀賞

福面の飴売り

岐阜県立岐阜農林高等学校 三年

加納 千晴

暮六つの太陽は、昼間の太陽より色濃く、眩しい。凍てつくような寒さが失せ、暖かい風が吹くようになると、日が経つごとに太陽が沈むのが遅くなっていった。

お江戸の神田したまちでは、大路沿いに表店おもてだなが軒を連ねており、四六時中ずっと人でにぎわっている。一方で、表店の裏に寿司詰めに配された裏長屋は、井戸に集まって世間話をする長屋のか・か・あ・たちでにぎわっている。

九尺二間の狭い長屋の一室。障子を透かして陽の光が入ってくる。日が長いと、そのぶん火を使わなくて済む。

仕立て屋の佐吉さきちは、頼まれた分の着物を繕い終え、布団もかけず眠っていた。何しろ昼から休まず作業をしていたため、体に疲れがたまっていたのだ。

暑くも寒くもない春の暖かさは眠気を誘う。佐吉は空腹も忘れて熟眠していた。

その時、

「佐吉さま、佐吉さま」と、誰かが佐吉を呼びながら部屋の戸口を叩いた。聞き慣れた声に、佐吉は目を覚ます。口から垂れた唾を袖でぬぐい、老いた犬のようによろりと立ち上がる。

「またお前か」佐吉は欠伸をかく。

からりと戸を開けてやると、戸の前にはやはり見知った人物が立っていた。

福めんの面を被り、縞模様しまの小袖を着た男である。

「また口が割れちまったのかい、祥之助しょうのすけよ」

佐吉が訊くと、男は何度もうなづいた。

「……あがんな」

佐吉は男——祥之助を部屋に入れてやった。

「ふた月前に縫ぬったばかりなのに、もうほつれてくるなんてなあ」

「毎度毎度、申し訳ありません。なにしろ、某それがしも他の商人と同じく声を張るものですから」

棚から太めの針と糸を取り出す佐吉に、祥之助はかしこまって言いながら、福面を外す。

福面の下には、凛々しい美貌があった。しかし奇妙なことに、鼻の下から顎にかけては、布できつく巻かれている。

祥之助が続いて布を取る。その布の下から現れたのは、耳まで裂けた化物ばけもののような口であった。裂けた口には針でぬわれた跡がある。

佐吉は針と糸を手に、口の裂けた祥之助に差し向かって座る。初めて

見た時ほどではないが、この口はやはりいつ見てもおぞましい。

「ぬうぞ」

「お願いします」祥之助が臉を伏せた。

佐吉は唇の端から耳にかけて、頬の割れ目を糸で縫いつけていく。顔に針を刺すことに抵抗はあったが、刺されている本人は全く痛くないという。祥之助は二年前の春からずっと佐吉の元に通いつめ、こうして耳まで裂けた口を縫って固定してもらっている。固定しなければ、口が開いたまま閉じられないのだそう。

「お前は大変だなあ」

佐吉は呟いた。

祥之助の妖物のような口は、当然生まれつきのものではない。刀傷である。

祥之助は今も鉛売りとして働いているが、以前は西方のとある国で足軽として前線で戦っていたのだという。耳まで届く口の裂け目は、戦で斬られた時の傷なのだそう。

しかし佐吉には、今でも解せないことがひとつあった。天下を分ける大戦が終わり、江戸の町の完成と共に安泰の世がやってきて、はや四十年ほどになる。だから戦乱の世から生きていると思しい祥之助は、普通に考えればもう老衰で死している。しかし祥之助の外見は、どう見ても佐吉と同じ年の二十そこそこの若者だ。

もしや祥之助は物怪の類か？ 佐吉はそう疑ったこともあったが、今となつてはどうでもいい。見た目は化物だが、祥之助は温厚で優しい男

だ。

最後のひと針を縫い終え、佐吉は肩の荷をおろした。我ながら良い出来だ、と思う。

「ほれ、できたぞ」

「ありがとうございます」

祥之助は膝の上に手を添え、深々と頭を下げる。祥之助は横に置いた行李から巾着袋を手にし、そこから二十文を取り出すや、佐吉にそれを手渡した。

「まいど」佐吉は受け取った。

十文くらいでいいんだがなあ、と佐吉はいつもながら思うが、祥之助がそれだけ払うというのだから、佐吉はあれこれと言わない。

「あのう、よろしければこちらをどうぞ」

恥じらうような小声で言うや、祥之助は行李から鉛を出して、佐吉に差し出す。小鳥を象つたのだろう。平たい鼈甲鉛だった。蜜色のそれを掌に乗せ、佐吉は「いいのかい」と問うた。「大切な商品、もらっちゃって」「いつもお世話になっているものですから。かような物でよければ」

「いいや。美味しいものに、変わりはねえさ。ありがとうございます」

佐吉が鼈甲鉛を翳して礼を述べると、祥之助は柔かく微笑した。だがその女のような仕草に対して、祥之助の腰にある古い血糊の付着した刀は、剣呑そのものだった。返り血を浴びながら前線で刀を振り回す、口裂け男の祥之助の姿が、佐吉の頭に浮かぶ。祥之助に斬られる者にしてみれば、彼はまさに「鬼」だったろう。

「——なあ、祥之助よ」

ふと佐吉は、口を布で巻いて覆い隠している祥之助に、こんなことを訊いた。

「なんで、足軽だったお前が、鉛売りなんて仕事してるんだい」

問いかけられ、祥之助は瞠目した。

「なんで、と申されますと……」

「前線で何度も戦って生き残ってるってことあ、それなりに腕が立つてこつたろう。仕官しようとは思わなかったのかい」

佐吉の質問に祥之助は答えなかった。しきりに目を泳がせ、動揺を露わにしている。

嫋々、と外に植えられた柳が風に撫でられて音を立てる。外で立ち話を

をするか、あたちの声がやけに大きい。

「——人を斬ってしまったから、もう侍になどなりたくないのです」

そこでようやく、祥之助が沈黙を破る。

「なんだそりゃあ。戦で人を斬れなかったらとつく死んでるだろう」

「はい。しかし某が斬り殺したのは、敵陣の兵だけではありませぬ。女、

老人、子供、みな見境いなく首を狩ったこともありました」

優しい祥之助の面差しが、一気に陰しくなる。「上官の命めいとはいえ、

酷い事をした」

「それが、お前が仕官しない理由かい」

「鉛売りでいる理由、と言ってください」

福の面を抱きしめ、祥之助はしかめられていた眉をほころばせる。

「某が斬ってきた者たちの祟り、というものでしょうか。この口が裂けてから、某は年をとらなくなり、傷もすぐに治ってしまうようになりました。おそらく、化物バケモノとして苦しみながら生き続けよ、と仏ほとけが下した罰でしょう」

「それと鉛売りと、何の関係があるんだい？」

「鉛を売っていると、気が休まるのです。戦で人の首を狩った時より、鉛を頼張る童わらわを見た時の方が、某はずっと幸せなのです」

いまいち祥之助の言いたいことが分からない。首を傾げる佐吉に、祥之助は苦笑した。

「つまり、こういうことです。某は足軽でいるより、こうして鉛売りとして働くことの方が生きがいなのです。——どうせ何時いつ死ねるのかわからぬ人生。もう人は斬りたくありません」

「仕事を生きがいに人生を過すごす、か」

佐吉はちらりと、丁寧に畳んだ服に一瞥いちべつをくれる。考えてみれば、立て屋以外の仕事をしている自分の姿など、佐吉は思い浮かべたこともなかった。これが一番、しつくりくる。これも「生きがい」なのだろうか、と佐吉はひとりで己に問うた。

「……まあ、そう思うと、俺もこの先ずっと仕立て屋でいたい気がするよ。なにせ、俺を頼りにしてくれてる、お得意お得意さんさんもいるわけだしな。やりがいのある仕事だ」

佐吉の視線が祥之助に移る。佐吉の言葉を理解した祥之助は、肩をすくめて目を細くした。口は隠れているが、これは笑顔だ。

「某の口を縫うことも、仕事ですか」

「おうよ。お前のほっとする顔を見ると、心なしか満ち足りた気分になるのさ」

佐吉が胸を張ると、祥之助は自らの口に触れて、

「あなたの客でよかった」と感嘆した。

「よせやい」佐吉は照れ隠しに祥之助の腕を肘で突くと、小さな可愛らしい鼈甲飴を口に含んだ。

——飴を食べたのは久方ぶりだったが、佐吉は思わず「がきどもが笑うわけだ」と声をもらした。

元剣士の血塗られた手によって作られたもの、とはとても思えぬほどに優しい甘さが口に広がった。

「優男のお前にゃ、飴売りが天職だ」

佐吉は賞賛を込めて、不器用ながらに笑いかけてみせた。

下町・神田の裏長屋。

元気なか・か・あたちの声に紛れて、ふわりと漂う白露のような、やわらかな笑い声が路にこだました。

天の雨の飴の話

群馬・共愛学園高等学校 三年

塚本 咲実利

しとしとと憂鬱な雨が降る夕方の事です。私の心臓に食い込んだ糸はまだ教室の、彼の席に絡まっていました。細く鋭く硬い紐を振り切るように歩けば、それは心をきりきりと締めあげるようでした。私の胸の内を写したような冴えない黒い傘に身を隠しました。学校の門をくぐる前にもう一度教室を振り返れば、彼の影が窓際に動いているのが見ええました。奥歯をぎりりと鳴らして、私を映さない瞳に背を向けたのです。

湿気た足取りで校門を抜けたときの事です。傘に硬い小さいものがぶつかる感覚がありました。緩慢な動作に目を上げた私が見たのは、それは不思議な光景でした。

あめが降っているのです。飴が降っているのです。私の黒い傘に七色の飴が降り注いでいるのです。確かに私の胸の奥はいつもよりざわついていたかもしれません。けれども幻覚を見る程ではないはずでした。傘からそっと手を伸ばすと、それは指先を掠めてコンクリートの地面に落ちていました。思いの外重く鋭く触れたそれに、私は驚きました。質量を感じさせる幻も存在するのでしょうか。私は両手を傘に添えて立ち尽くしていました。

今日もいつも通り味のしない一日を終えて家に帰るつもりでした。前を歩いて行った後輩たちの背中には明るい色に塗られたコンクリートの壁のようでした。隣を足早に抜けていくサラリーマンは時計の秒針を追い

越すようでした。子供を連れた母親は、道端に捨てられた煙草を避けるように綺麗なハイヒールで芝生の上を迂回していきました。

小さな衝撃が傘を通して伝わります。時折あめが骨に当たって固い音を出しますが、傘は気丈に振舞っていました。あめが傘を打つ低い音は心を均すように優しく響きました。いつの間にか足元に降り積もったあめは溶けず流れず、ただ灰色の光を受けてきらきらとしていました。道行く人が広げる傘の色合いは様々でした。偶然に並べられた色と大きさには同一で無い故の不思議な調和があるように思えました。あめは降り続きます。地にへばったあめは道路を埋め尽くして、白線も、横断歩道も、でかでかと書かれた「とまれ」の文字も覆い隠していました。

傘が防ぎ損ねたあめが一粒、履き古した革靴の隣に転がりました。淡い赤のさとう玉でした。黒い傘の影に浸ってもなお魅力的に輝くので、私はそっとしゃがみ込みました。前かがみなった拍子に傘に積もっていた、あめの粒がばらばらと流れ落ちました。

摘まんだ赤の珠は、つるりとした小さな飴で、内に細かな空気の泡が閉じこもっていました。傘を少しばかりよけて空を見ます。あめは絶えず降ってきます。目を落として周りを見ます。あめは絶えず積もってきます。周りの人は、このあめに気が付いているのでしょうか。それだけに過ぎて行く人々は、普通の顔をしていました。いつも通りの安堵と、言い知れぬ浅い不安が胸にありました。今日の私は変なのです。手のひらに収まった赤い飴が欲しくてたまりませんでした。食べたくて、たまりませんでした。その艶やかな赤に、光る気泡に、私は惹かれました。

道の隅とはいえ、いつまでもしゃがんでいては目立つでしょう。ゆっくりと立ち上がり、積もったあめを革靴で踏みつけて人の少ない裏通りの方に抜けました。そっと周りを見ながら進みましたが、誰も私を気にかける事はありませんでした。

道を一本逸れただけで、まるで別世界のようなようでした。崩れかけたコンクリートの背中や通気口、錆びて溶けたような鉄筋が外に零れていまし

た。裏通りにもあめは降り積もっていました。平らな靴底はあめの上を歩くようには出来ていないようでした。何度か足を踏みちがえ、何度も滑って私は歩きました。私の目は錆びた道の端に座り込みました。握りしめた赤い飴は、溶けもせずに美しいままそこにありました。ふうっと息をかけ、ブラウスの胸元で拭って、再び見つめました。血の様な赤でした。絵本の中の白雪姫は血潮の唇を称賛されていましたが、その美しさの形容を何となく理解した様に思いました。

それを口に残したのは、ごく自然なしぐさの末でした。

その飴は、不思議と知った味でした。甘いと思ったさとう玉は塩気と薄い鉄の味がしました。それを知ったのはずっとずっと遠い昔の、時間の感覚さえ無くなる様なまどろみと衝撃の中でした。脳裏に閃いたのは絞られる感覚と、途切れる滝の音、肌に触れる温い風でした。隣で上がった産声を意識の外で聞いていました。たった一つの故郷への道標を二枚の冷たい刃で断ち切られた時の味でした。それは、切なさとともに自立した生への渴望を内に秘めていました。

小さな赤い飴は口の中ですぐに溶けてしまいました。水に触れると溶けるような材料でできたものだったのでしょうか。傘を打つあめの音は変わらずに continué しています。それが胸の奥をくすぐるのは私の気のせいだろうと思います。私はもう一つ、あめを舐めてみる事にしました。これが現実なら私が食べるのは飴玉に過ぎないし、幻なら所詮は雨粒なのです。食べても害は無いのです。私はもう一度手を差し出しました。

降って来たのは橙色の飴玉でした。口に含めば甘酸っぱく、少し青臭く、暑い夏の大地を潤すような味でした。私はこの味にも覚えがあるようでした。それは満ち足りた幸せでした。汗の滴る頬とそれを冷ます爽やかな風でした。髪まで汗で濡らした彼の横顔と冷たい麦茶。飴の溶けた唾液を呑み込む度に、喉を通った優しい感覚がありありと思い出されるのでした。それがあたたかな友情と好意に基づく幸せだと知ったのは、この味に出会うよりずっと後のことだったと思います。

このあめは、きっと私の幻覚なのです。雨粒に味が付いているはずが無い事にも、降ったきり溶けないぬるい電が無い事にも、綺麗な色が付いているはずもない事にも、私はとうに気が付いていたのです。私は気付かない事で、異常な自分を守ろうとしたのでしょう。私はもう一度空に手のひらを向けました。爪にぶつかっただけは、黄色のあまつぶでした。その黄色は、透き通ってはいましたがどこかすんだ黄色でした。

それは曇天のじめじめした空気の味でした。一段高い位置に上った背中と、「生徒会選挙」のめくり台、覆い潰すような拍手とスカートを握りしめるこぶしの震えでした。それは負けの味でした。彼の隣に座るのは、私ではなく彼女だったのです。塗りつぶしたはずの、遠い遠い思い出でした。胸にせり上がる何かに耐えかねて、私はがりと飴を噛み砕きました。

外れの味の名残を消そうと、私は躍起になりました。あめの衝撃に負けて折れた傘の骨が私の頭に触っていましたが、問題ではありませんでした。しゃがみこんだ脛まで積もったあめを私は握り取りました。手に囚われたあめのいくつかは溶けて、水になりました。指の隙間に残ったのは深い森の静けさを思わせる緑色のあめでした。それは、私の心を均して落ちつけてくれるはずでした。私は迷わず口に放り込んだのです。

今日は私の期待が裏切られる日なのです。胃の辺りで強く帯を締め上げられた様な感覚に襲われました。通じない意図と、小さくささやかれる声でした。それは気持ちの相違とすれ違いでした。的外れの努力の末の、報われない結果でした。何よりも胸を抉ったのは、教室の隅で退屈そうな彼の二つの目でした。私は堪らずに小さくなった飴を飲み込んでしまいました。

どんなに不快でもあめを食べ続けたのはそれだけの魅力がその飴にはあったからでしょう。それを食べれば、楽になれると思ったのです。幸せになれると思ったのです。傘には小さな穴が開き始めていました。地面を探れば、指先に露が這いました。触れたあめは青と藍の二色でした。

冷静さを失った私の目には、どちらが何色でどんな味がするかなど、さして重要な事ではありませんでした。食べる事だけが、大切だったので。

二ついつべんに頬張っても、案の定美味しいとはいえませんでした。塩辛く、苦く、凍るような冷たさと孤独感を、改めて突きつけられました。流れる電子オルガンの音と彼の言葉。渦巻く別れを惜しむ声。そこに私の声はありませんでした。私は、さようならを、言いませんでした。ふたつの飴が口の中から消える前に、私は周囲の変化に気がつきました。いつの間にか強くなっていったあめと、足元に溜まったあめでした。見渡せば、あめはしゃがんだ腹のあたりにまで積もっていました。穴が開き、骨が数本折れた大きな傘のおかげで私の周りは膝ほどまでで済んでいたようです。見渡せば、一面紫色に染まっていました。空を見上げても降ってくるのは紫ばかりでした。

私は膨らむ不安を押さえつけて、紫色に手を伸ばしました。それを口に入れたのが先だったのでしょうか、後だったのでしょうか、私は黒の紳士傘を取り落としました。

それは私が一番欲しかった味でした。思い起こされるのは今日のことです。今日を作った昨日のことです。昨日を作った一昨日のことです。紫の飴は、私の舌がそれを転がすまでも無く溶けてなくなりました。私は気がつきませんでした。

あめは涙の味でした。ずっとこらえた涙の味でした。伝えきれない友情と感謝と恋の言葉でした。意地を張った心の言葉でした。

足元のあめは一斉に水になり、降ってくるあめは一斉に雨になり、私に降り注ぎました。私は立ち上がって空を見上げます。目元に当たって弾けたあめは頬を伝って地面に落ちました。雨は胸を締める紐を溶かすようでした。ひとしきり流れるとそれは不意に止み、灰色の雲に代わって薄く光る雲が青空にかかりました。頬に残った雨は飴と同じように薄く涙の味がしました。

骨が折れて破れた紳士傘を携えて、大通りを覗きましたが人々はまだ雨が上がった事には気が付いていないようです。傘を抱いた私はゆっくりと学校へ引き返しはじめました。

佳作

老年生活

山梨県立甲府東高等学校 二年

坂本 駿太

倉木淳一が目覚めると、同時にベッドの隣に待機していた海も起動した。

「おはようございます。よくお休みになりましたか」

「ああ」

淳一が答えると、海は微笑んで彼が起き上がるのをアシストする。

八十を越えた淳一にはベッドから降りるといふ動作がかなりの苦痛となる。

しかし、海が助けてくれるおかげで、その痛みはかなり軽減される。

海の、華奢ではあるものの人とは比べものにならない力を持つ腕に支えられながら、淳一は立ち上がる。

海は女性型の高齢者介護支援ロボットだ。

二〇七〇年代後半に厚生労働省が発表した「ケアロボットプラン」は、歯止めがきかない少子高齢化と、それに伴い年々深刻化していく介護者不足に対する苦肉の策だった。政府が無償で介護用のロボットを要請のあった高齢者達に配布し、ロボット達がその介護を担当する。

淳一は妻が死んだ後、その介護ロボットの申請をした。家事は妻に任せてばかりだったので何もできないし、元々体も丈夫ではない。それに息子夫婦の手を煩わせるのは御免だった。嘗て両親の介護を続けた淳一としては。

「では、体調チェックをさせていただきます」

海は右手で淳一の腕の脈をとり、左手を淳一の体全体に翳していく。彼女の左掌にはセンサが内蔵されていて、淳一の体に不具合があればすぐに感知する。また、その日その日の体調データは海のAIからインターネット経由で医療機関に送信され、病気の予防に役立てられる。

「はい、異常ありません。長生きできますよ、淳一さん」

そう言うて海は人懐こい笑みを浮かべた。

海は実によく人間に似せて作られてはいるが、所謂不気味の谷と言うやつで、彼女がロボットであるということは誰でもわかる。

それが不気味だといってケアロボットを毛嫌いする人もいるが、淳一は海をとてゝも気に入っている。何しろ、彼が唯一家族と言える存在なのだし、家事全般を請け負ってもらっているのだから、愛着を持つなど言うほうが無理な話だ。

○

海が朝食を作っている間、淳一は居間で今朝のニュースを見るのが日課になっている。

そのトピックスの一つに淳一の目は釘づけになった。彼が高校時代好きだったバンド「REX」の最後の一人が亡くなったのだ。享年九十七歳、とある。

これでまた一つ、自分の時代が幕を閉じたのだと思うと淳一は朝から暗澹たる気持ちになった。

ふと、このニュースを裕介は知っているだろうか、と淳一は携帯端末のSNSアプリを起動させる。

裕介は淳一の高校からの親友で、とも「REX」のコピーバンドをやっていたこともある。しかし彼とはもう何年も現実にはあっていない。ネット上でのトークばかりだ。

『REXの最後の一人が死んだらしい』と書き込むと、すぐに返信が来た。

『ああ。俺達の時代がまた一幕を閉じたって感じた』

こいつ分かってるな、と淳一は微笑む。流石俺の親友。

そうやってしばらく裕介とトークしていると、海が朝食を載せた盆を持って台所から顔を出す。

「もうご飯ができましたけど…」

「ああ、悪い、今止めるから」

淳一はSNSを中断する。

食卓に、完璧に栄養バランスが取れた料理が並べられていく。菌ごたえや量、味すら今の淳一に合わせられている。ケアロボットの面目躍如と言ったところか。

「いただきます」

海も淳一の向かいに座ると同じように朝食を取り始める。彼女の動力源は人間と同じで食べ物だ。これは人間に近づけようという配慮なのかもしれない。

「REXの」

味噌汁に口を付けていた淳一が唐突に言う。

「音源はどこにあったかな」

それだけで海はすぐに彼の意図を理解した。

「CDは探せばまだあると思います。お聴きになりたいのでしたら、この後直ぐに探しますよ？」

「ああ、頼む」

久しぶりにあの曲を聴いてノスタルジーに浸るのもいいだろう。淳一はぐくりと味噌汁を飲み干す。

そう言えば裕介の葬式にもREXの曲をかけたんだっただな。

そんな思考が淳一の脳裏を掠め、彼は眉をひそめる。

箸が空中で静止する。

何かがおかしい。

何がおかしいのだ、と淳一は必死になって考える。そうだ。確かに葬

式にはREXの曲をかけた。しかし裕介は生きている。現に淳一は朝彼とトークした。ではあれは誰の葬式だったのか。あれは。そう。

裕介だ。

淳一の頭の中にかかっていた靄の様なものがすう、と晴れた。

まるでもう一度目覚めたようだった。

二年前、心不全で裕介は死んだのだ。

何故俺はこんな大事なことを忘れていたのだー俺は呆けているのかー無意識のうちに淳一は頭に手をやった。

いやそんなことよりもだーじゃあ俺と今まで「会話」していたやつは一体誰なのだー。

「幽霊」という二文字が浮かぶが淳一はそれを自分で否定する。ネットの幽霊なんて、笑い話にもならない。

「淳一さん？ ご気分でも悪いのですか」

海の言葉で淳一は我に返った。

「いや、ちょっと考え事…」

慌てて箸を再び動かす。が、頭の中は裕介のことがぐるぐるとまわっていた。

○

海が食器を片付けるカタカタという音を聞きながら淳一は考える。

淳一は確かに死んでいる。それは一時的にせよクリアーになった彼の頭が証明していた。では彼が「会話」していた裕介の正体は誰か。

最も可能性が高いのは成りすましである。

ただ、そんなことをするメリットは何なのか淳一にはさっぱり分からなかった。

借金の相談でもあれば、それは振り込め詐欺の一種なのだろうが…。

それに、「偽」裕介の淳一に対する受け答えは本物の裕介そのもので、全く違和感がなかった。呆けている（かも知れない）とはいえ、他人が旧友に化けているのに気付かないほど重症だとは思えなかった。

そこまで考えて、淳一は漸く犯人が分かった。裕介を騙ることでメリットを得られる人間。淳一のパーソナルデータをことごとく知る人間。尚且つ四六時中インターネットにアクセスでき、他人の人格を模倣できる「頭脳」を持つ人間。

勿論それは「人間」ではない。
何のことはない。犯人は海だ。

○

淳一は食器を洗っている海を眺めた。

彼女は介護用のロボットだ。当然、その主人が認知症などに罹った場合の対処法もプログラムされているに違いない。もし、死んだ友人が生きていると思ひ込んでいたら、ネット上を介してさもその友人が生きているように見せかける―これがその対処法の一つだったとしたら。

淳一はぞっとした。―俺がネット上でしか会っていない友人の、一体何人が本当に生きているのだろうか。もしかして、もう俺の旧友達はこの世になく、俺は唯一人、海と会話を続けていたのではないだろうか―。

その時、そんな淳一の目線に気づいたのか、海がこちらを見る。

そしてふわっと恥ずかしそうな笑みを浮かべる。

淳一ははっとした。

だから何だというのだ？

頭が呆けて、頼る友人知人もなく一人孤独に死んでいくのと、こうやって自分に優しく寄り添う者がいて、いるかないかはつきりしないものの、友人と話し合うこともできるのと、一体どちらが幸せだろうか。

勿論、後者だ。

淳一は静かに笑う。

「海」

「はい」

「CDはやっぱいいや」

海は首を傾げる。

「いいのですか」

淳一は頷く。

「それからな、今日は、裕介の墓参りに行こう」

一瞬、海の動きが止まる。それから静かに頷いた。

「ええ。分かりました。途中でお花を買っていきましょね」

淳一は満足げに笑うと目を閉じた。

―長生きするのも悪くないぞ、裕介―

老人はとても、幸せだった。

白いマリア、白の非処女

鹿児島・屋久島おおぞら高等学校 三年

折口 史帆

昔、私が中高一貫の女子高にいた頃、修学旅行で行った大きなステンドグラスの教会にはいくつかの聖母マリア像があった。私はその中でも、一つの像に強く心惹かれた。イエス様がお宿りになったことを告げる天使に、マリア様が白い陶器の肌で優しく、この世の誰にも負けない幸せのほほえみを浮かべているように見える、像。その少女の身体に重すぎる運命を背負いながら。少々歪んだ、でもまだまだ純粋だった私はふと、そんなことを思った。

——マリア様。その運命を受け入れることはあなたには、御辛くなかったのですか。

わたしは白い像を仰いで心の中で尋ねた。私はクリスチャンの厳格な母のもと大学までエスカレーター式的女子校で育った。だからか、性的なこと、それからそれにつながる妊娠、出産とかに生理的嫌悪を感じてやまなかった。というか妊娠、出産とかに生理的嫌悪を感じてでは理解していたけれど、宇宙人の繁殖図を見ているようなそんな気味の悪さを感じていた。そんな私に、マリア像は少し含んだように笑ったように見えた。

上司が妊娠した。割と難しく、それでいて女性的な茶目っ気も持ち合わせた人だった。線の細い身体。高めのヒール。まだ妊婦には到底見え

ない二カ月のワーキングウーマンを私はぼんやり見ていた。上司はもう名前を決めているらしく、たくさんの女子社員に囲まれて、人が変わったように甘ったるい声で

「樹はね——。」

とささやいた。優しく下腹部をさすりながら。私はそんな上司をちよつとめんどくさく見ていた。私には自分の将来が想像できない。今、この瞬間を生きるのに精いっぱいなのだ。私は、二十分もかけて書いた三行をマウスで一気にデリートした。早く産休に入ってくれればいいのに。もちろんそうなれば私の仕事が忙しくなるだけなのだが。私は彼女を見て良くそう思うようになった。上司は別段変わらない。毎日当たり前のようにだれよりも早く出社する。そして、ときどき下腹部を見つめるだけで。それからのこと、彼女のおなかの日増しにおおきくふくらみ、だんだんとハイヒールはかわいらしいペタンコ靴になり、線の細いスーツは、柔らかな素材のワンピースになった。上司は以前よりずっとなんと

いうか人間的にみえ、私にも感じられる母性があった。私の仕事量は日に日に多くなり上司の帰る時間は早くなり、私は遅くなっていった。編集長が私に言った。

「はい。」

私は答えた。これは確定じゃない。でもほぼ確定である。私は周りの女性社員の目を気にしていた。無論、この昇進は私の実力じゃない。だいいち、まだライバルはたくさんいた。私は仕事で夜を明かすことも多くなった。圧倒的に時間が足りない。自分の実力のなさを思つてヘドが出た。上司は何でも無難にこなす人だった。私とは違って。私がクマをつくり、サンドイッチのビニールをじれったくはいでいた昼休み。上司が声をかけてきた。

「体調大丈夫？ 私の仕事が回って来ていっぱいいいよね。隣、い

いかな。」

「どうぞ。」

私は丸い白テーブルを腕でざっとあけた。上司は薄桃色の小ぶりの弁当箱をテーブルに置いて、水筒の温かいハーブティーを飲んだ。その日も私は徹夜明けだった。わたしはつい、嫌味を言った。

「いいですよー。妊娠してそのまま退社なんて。女としての幸せはつかんだものじゃないですか。編集の仕事なんて外から見ると華やかじゃないし、徹夜ばかりですもん。それでもダメ押し。うらやましいです。ホント。」

上司は少し間を置いてそれからカラカラ笑った。

「そうね。今、幸せだわ。もう今みたいには仕事はできないでしょうけど、代わりに得られるものがあると割り切ってる。あなたにはたいへんな思いをさせるけど、のりこえれば、あなたは同期より一歩リードできる。」

私は、エスプレッソ・コーヒーをすすった。女性にはしきりに人生設計という言葉が提示される。結婚や妊娠、いつ会社をやめるか。彼女のよう突然設計が狂うこともあるかもしれない。そんなことでこうして会社を辞めなきゃいけないかもしれない。女性の社会度はまだ小さい。おそらく上司はまだ産休をつたえただけなのだろう。でももうすでに社内は退社するのが当たり前の雰囲気になってる。それは会社が、社会がそうなっているからだ。まだ女性に社会は冷たい。上司は社会復帰するとしてもこの会社には戻ってこないだろう。もしかしたら専業主婦になるかもしれない。そうだこの人にはその方が似合う。エプロンをして料理をして、近所の人と話して、大切な人の帰りを待つ、そんな姿が。きっとこの人のことだから、家事も上手くかしく丁寧になすだろう。上司の産休まであと三週間。上司は疲れた私の顔を見て、それから大きくなったおなかを見て、ゆっくりなで、ほほえみながら言った。すごく優しい声で。

「樹はねーダウン症なんだって。羊水検査でわかったの。それでもね。」

いいの。産もうと思うのよ。わたしももう三十八でしょ。それで会社に戻れなくても、いちにち家にいて誰かの帰りを待つ生活も、わるくないのかなーって。これ以上になるとこどものぞめないし、おろしても、ね。せつかく来てくれたんだもの。今はうれしいの、すごく。ただ、ただ、ね。何があっても大切に育てるわ。そうね、――母親として。一生面倒見るつもりで。」

誰に言うわけでもなく上司は宣言した。彼女は笑っていた。淡く、優しく。私は彼女の目を見られなかった。なぜか。どうしても。私の頭には、ゆらり、あの日の白いマリアが浮かんで、私はパタパタ手を振ってそれを振り払った。上司はそんな私を少し不思議そうに見つめていた。産休が近くなつて、上司は、おなかの様子を見せにときどき出社するようになった。私は彼女のおなかを直視できなかった。もうおなかの子はぐるぐる動くようになっていた。

「触ってあげて。ほら。樹氣君。おねえさんだよ。」

上司は一步輪の外の私に言った。私が手を恐る恐る当てると、ぽこん。軽く小さな足が張ったおなかを通して私の手にあたった。

「わあっ。」

私はまわりの女子社員と同じように明るい歓声を上げていた。あ。生きてる。動いてる。生きてるってあったかいんだ。白いコトンのチュニックごしのぬくもりが新鮮で私は触れた右手を左手で握った。妊娠に嫌悪を感じていたのがすこし恥ずかしくなった。

上司が産休に入って私は正式に昇進した。これからはもっと忙しくなるだろう。私は新しい命を迎える準備に入った上司のことを思っ、彼らがあなたかくありますように、と祈った。彼女がエプロンをして、大切な人待つ姿がほんのりと想像できた。私もいつかはこの身に命を宿す日が来るのだろうか。ふとそう思うと、下腹部にあたたかさが宿るような気がした。

ゴキブリ・ダイアリー

東京・東京大学教育学部附属中等教育学校 二年

小川 茉莉乃

「今後、あなたのことは一切、何もやりませんから。」

その言葉に、私は戦慄した。「一切何も」というのは、要するにそういうことを意味している、ということの間違いなよね。頭は真っ白な絶望色に染まり、自分に向かって周りの景色が闇に吞まれていくような錯覚に陥った。

ことの発端は些細なことだった。私が炊飯器のスイッチを入れ忘れた、ただそれだけ。普段の自分の物忘れの酷さが祟り、それを引き金にとうとう母の堪忍袋の緒が切れた。自分が悪いのは理解していたので、最初にはひたすら謝った。しかし、説教中に母は過去のことを持ち出し、さらに私を「何も出来ない奴」と言った。一部分だけの判断及び事実で全体像を決めつけるのはおかしいと思った私は、すぐさま反論に出た。そこからは、近所迷惑も考えず、大声上げての大喧嘩。収拾がつかなくなり、最終手段として用いられたものが、先程の母の言葉。私を恐怖のどん底へ突き落とすのに十分すぎるものだった。しかし私も引き下がる訳にもいかず、売り言葉に買い言葉で「いいですよ」と言ってしまった。これの本当の恐ろしさも知らずに。

喧嘩後一日目。「一切何も」という言葉はすでに目に見える形で実行されていた。午前五時半。学校があるためいつも通りの時間に起きて、いつも通りに朝食を食べる……はずだった。いつものテーブルを見る。

私の分の朝食がない。弁当も用意されていない。

「なんで姉ちゃんのだけないの。」

何も知らない一つ下の弟が母に尋ねる。対する母は何も言わずに、黙々と弟の弁当の用意をしている。今から朝食と弁当を用意したのでは学校に間に合わないかと判断した私は、水筒に氷と麦茶だけ入れて、鞆につめた。そのまま制服に身を包み、いつもより早い時間に逃げるようにして家を出た。

喧嘩後二日目。昨日は、朝・昼・夜とともに食べていない。かろうじて、昼は心優しい友達から少し食料を恵んでもらった。しかしいつもでもそういう訳にはいかない。今日の目標は食料の確保だ。母はいつも四時半には起きている。つまり、それより早い時間に起きて、朝食と弁当の用意をしよう。と、心に決めて起きた三時半。辺りはまだ暗く、静か。電気をつけていても何か出そうな雰囲気だったが、そのようなことを考える暇など、私には皆無だった。慣れない手つきで朝食と、朝食と同じメニューの弁当を作った。ふと時計を見る。あともう少しで母が起きる時間だった。急いで朝食をかつ込み、痕跡を全て残さないようにしてから、弁当を持って自分の部屋へ駆け込んだ。このとき、「立つ鳥跡を濁さず」の難しさを知ったような気がした。

喧嘩後四日目、体育着を持ち帰ってきた今日の私は、自分の洗濯物が多かった。いつもなら、少ないからお風呂場で洗濯物を手洗いのだが、今日のは多くて自分で洗う気にはどうしてもなれなかった。さて、どうしよう。少し思考を巡らす。そういえば、前にこんなことあったかな。「こんなに汚れてきて。洗濯するの誰だと思ってるの。」

「洗濯機。」

そうだよ。洗濯物は洗濯機がやることだから、「一切何も」の外にある。口には出さないが、心の中に歓喜の渦がこみ上げてきた。ものを洗濯機に放り込む。あとは頃合いを見計らって、誰よりも早く洗濯物をとり出して干すだけ。誰にでも思いつくことかもしれないが、我ながらいい

案だと、少し鼻が高くなった。

喧嘩から一週間。珍しく母が話しかけてきた。

「あなたの通信代を払う必要がないので、携帯を解約します。」

絶句した。いきなりすぎた。ことをようやく理解した私は、潔く携帯を差し出した。自称携帯依存症ではないと自負しているため、手元にならないで、すぐに順応する自信があった。強いて不都合を挙げるなら、誰かからの大切なメールに返信出来ないのと、私の最大の娯楽の携帯ゲームが出来なくなることだった。過ぎたことを嘆いても今更なものならないので、なんとかなるさの精神で楽観的に考えようと、普段からネガティブ思考の自分に言い聞かせた。

喧嘩後十日目。大分料理に慣れてきた私は、最近時間が余るようになってきた。その時間は、ここでただ無意味に過ごすか、たまに出て来るゴキブリを、母のスリッパで退治していた。どうにか有効的に使えないかと思案しているうちに、頭がボーッとしてきて、とてつもない眠気に襲われた。机に突っ伏して目を閉じようとした。そのとき気付いた。二度寝をすればいいのだと。すぐに飛び起き、自分のベッドに向かう。目覚まし時計をセットし、再び眠りについた。

喧嘩から二週間。学校でのことだった。

「瘦せたね。」

同性の友達からよく言われるようになった言葉だ。自分の最大のコンプレックスである、一向に細くならない太ももを見て「どこらへんが」と聞く。すると「こう、全体的にシュッとまった」と口を揃えて言う。勿論食事制限は全くしていない。運動も人よりしていない。とすると、考えられるのは精神的なもの。なるほど、私は精神的負荷を与えられると痩せるのか、と新しい発見をすると共に、自分は思っていないくても精神は悲鳴をあげていたのだと、人間の精神の脆弱さを認識する。それも体に出るくらいに。だからといって、この生活をまだやめる訳にはいかない。自分の体に鞭をうった。しかし、頭で思い込むことは出来ても、

本能に忠実な精神を管理下に置く術を、私は知らなかった。

先程から事実しか列挙していないが、ここまでくるともう何も感じなくなる。ことあるごとに一喜一憂するのすら面倒くさい。一人で優雅に夕飯を食べながら、そのような物思いにふける十五日目。なぜか母が来た。私を一瞥すると、

「人がいないのを見計らってコソコソと、まるでゴキブリだな。」

とだけ言い、どこかへ言ってしまった。生憎、独り言に返答する口を持ち合わせていない私は、こんなくだらないことを伝えに来たのかと、母の幼稚な理性に呆れ返る。それにしても、「ゴキブリみたい」、か。ではそんな母の言葉を取って、今の私の生活を「ゴキブリ・デイズ」と名付けよう。と、小説家気取りのことを、頭の中で述べてみる。

ゴキブリ・デイズ二十日目。

「じゃあ、十時にいつもの駅で待ち合わせね。」

その日、何人かの友達とカラオケに行く約束をした。自分の音痴な歌声を披露するのはとても申し訳ないことだが、日頃の鬱憤をはらせるいいチャンスだと思った。このとき、正直私は浮かれていた。目の前に広がっていると妄想したいお花畑に向かって、スキップ出来るくらいに幸せに満ちあふれていた。何着て行こうかな、カラオケの後なにかするのかな。いくらぐらいい持っていこうかな。その考えが頭をよぎった瞬間だった。今まで全く考えなかった重要事項が、脳内を支配する。金銭の問題だ。浪費家ではない私は、幸いにも少しばかりの蓄えがあった。しかし金はいつまでもあるものではない。そういえば、今月分の小遣い、まだ貰ってなかった。気付くのが友達と別れてからで心底よかった。多分今の私は顔面蒼白になっているはずだから。残念ながら、私の学校はバイトを固く禁じている。それは分かっているが、つい求人広告に手が伸びてしまった帰り道。

ゴキブリ・デイズ四週目。今日から二泊三日の学校の宿泊行事。行き先は奈良。昨日、最終点検を済ませたが、何か忘れていそうな気がし

てならない、というお出かけ前のお決まりの不安が私を襲う。確実に分かっているのは常備薬。腹痛の薬は入れたが、熱冷ましはどこにあるか分からず、入れていない。いざとなったら友達から貰えばいいか、という結論に達し、その問題は解決した。よし、と気合いを入れた。たった三日間だけでも、この家から自由の身になれることを想像すると、心に羽が生えたように、気持ちが軽くなる。私は新境地に赴くような気構えと足取りで、家を出た。

そしてその日の夜、私は三十八度の熱を出した。

熱は次の日になっても一向に下がらず、さらに、なぜか声まで出なくなっていた。「カラオケで歌い過ぎて喉が枯れた」の比にもならないほど酷かった。

「お母さんに連絡しておいたよ。明日、解散する駅まで迎えに来てくれるって。」

引率の先生の手前、「はい、ありがとうございます」といつておいたが、顔に思いつき「不服」や「不満」の文字が書かれていただろう。このような顔をしたら先生に誤解を与えるかもしれないということなど、考える余裕もなかった。

最終日、母は本当に迎えに来ていた。先生の手前、母とはにこやかに話していたが、内心は気まずさでいっぱいだった。どうせこの時間も先生がいなくなるまで。あとは一言も口をきかずに家に帰り、またいつも通りの、ゴキブリのような生活に戻るのだと確信していた。先生の姿が見えなくなり、私と母は歩き出した。

「熱、大丈夫。」

懐かしい、優しい母の声。私は素直に頷いた。

「食欲あるの。何か食べたいものは。」

「……食欲はある。嫌いなものじゃなければなんでもいい。それより、ゆっくり話が出来る場所に行きたい。」

「そっね。じゃあ、しゃぶしゃぶ行こうか。私ずっと食べたかったんだ

よね。」

その後、しゃぶしゃぶ屋で、お互い冷静になったところでゆっくり、丁寧に話し合い、ゴキブリ・デイズから丁度一ヶ月、私たちは仲直りをした。家に帰ると、弟がかなり心配そうに私たちの様子を伺っていた。

「大丈夫。もう仲直りしたよ。」

弟の顔に安堵の色がとる。相当緊張していたのだろう。私は、母のみならず、弟にまで迷惑をかけていたのか、と罪恶感に苛まれる。そして家を見渡す。冷めたようにしか見えなかったこの光景は、温暖色を帯びた柔らかな色に満ちていた。ただいま。大好きな我が家。

「あなた病人でしょ。もう寝なさい。」

「うん。そうするよ。おやすみ。」

自分の部屋に入ると、ベッドに倒れ込んだ。張りつめていた糸が一気に緩んだ感覚を覚え、私は静かに枕を濡らした。

佳作

じいちゃんとはなっこりー

山口・野田学園高等学校 二年

安部 雄登

高校を卒業し、東京の私立大学に進学した僕は、四月から一人暮らしをしていた。

上京してから少しすると、山口に住むじいちゃんからダンボールが一箱、送られてきた。

中には、大量のはなっこりーが入っていた。

はなっこりー、それは菜の花とブロッコリーを混ぜて生まれた山口独自の野菜だ。

それを見て、僕はため息をついた。僕ははなっこりーが嫌いだ。菜の花の苦味が好きになれない。そもそも、僕は山口が嫌いだ。

はつきり言つて、何もない県である。大人達は歴史がある、文化があるとよく言うが、若者にとってはつまらない場所だ。

だから僕は山口を離れたのだ。

もう一度ダンボールの中を見ると、手紙が一枚入っていた。そこには、「よおけ取れたけえ、食べりんさい。ぶち美味しいけえね」と、方言満載で書かれていた。

じいちゃんは、はなっこりー農家なのだ。

僕は上京して以来、方言を全く使っていない。まあ、当然といわれればそうなのだが、使いたくなかった、というのが一番の理由だった。

その後も、じいちゃんは何度かはなっこりーを送ってきた。その度に僕は苦い思いをする。

「そりゃ、ドンマイだったな」サークル仲間のケンジは言った。

「そもそも自炊しないんだけどさ、これがあるから、やらざるをえないんだよね」僕は答えた。

「いいじいちゃんやん」

「そうなんだけどさ…」

「そういえば、コートは夏休み、山口に帰るの？」コートとは、僕の名前である。

「一応ね。どうせ母さんは忙しいだろうけど、じいちゃんには顔を見せてやりたいし、一週間ぐらいは帰るかな。…嫌だけど」

「そんなに嫌なん？ 山口。俺は憧れるけどな、田舎って」

「そりゃ、ケンジは都会育ちだからだろ。本当に何にも無いからな、山口は」

「けど、東京と違って、空気はきれいやろ。田んぼや畑も、ここには無いしさ」そういうケンジの目は、小さな子供みたいだった。

東京から飛行機で一時間半。それが東京から山口までの距離だ。

そして、空港から車で移動して、山の近くまで行くと、じいちゃんの家はある。

僕は玄関の前で深呼吸すると、呼び鈴を押した。すると、五秒後にじいちゃんは出てきた。

「おお、コータ。元気にやっちゃったか？」

「うん。元気にしちよるよ」僕は答えた。

半年ぶりに使う方言だった。

「暑いじゃろうけえ、早よ入りんさい。今日もはなっこりーがようけ取れちよるよ」じいちゃんは笑って、中に入れた。

「また、はなっこりーか…」その言葉を僕はのみこんだ。

じいちゃんの家は、昔ながらの古い家だ。

玄関には、農作業用具が置いてある。

中に入り、じいちゃんと少し話しをすると、早速することがなくなつた。

TVは面白いのをやってないし、wifiも無いからアプリでも遊べない。

おまけにクーラーが無いからかなり暑い。

僕はシャツ一枚になり、床に寝転んだ。

「だから嫌なんだよ、田舎って…」僕は寝返りを打った。

ごはん。はなっこりーのゴマ和え。はなっこりー入りのみそ汁。焼き魚。つけあわせにもはなっこりー…

まさにはなっこりーのフルコースといった感じの夕食が、風呂上がり僕を待っていた。

「コータははなっこりーが大好きじゃけえな。よおけ使ってみたで」笑っ

て言うじいちゃんを見ると、何も言えなかった。

「苦い」の一言をゴマ和えと一緒にかきこむと、「うん。ぶち美味しい。じゃけえ、また作ってな」口が勝手に動いていた。

じいちゃんは嬉しそうに頷いた。

「明日もまた、はなっこりーだな、これ…」

その嘆き言葉はみそ汁で流しこんだ。

次の日も、その次の日も、同じような日々が続いた。一日中暇して、はなっこりーを食べて、熱帯夜をクーラーをつけずに過ごす。

そんな日々を続けていると、やがて僕が東京へ戻る二日前になった。

ようやく山口から出られる、そう考えると嬉しかった。はなっこりーの苦味も、その日はあまり気にならなかった。

東京に戻ったらまず何をしようか。

そう考えていた、その日の夜のこと…

じいちゃんが、倒れた。

「もって、あと一年だと…覚悟しておいて下さい」

一晩中手術して、何時間もの間手術室の外で待たされて、ようやく手術が終わって、医師に呼ばれたと思ったらこう言われたのだ。

病名はよく覚えていない。ただ、いかにも重い病気、といった感じの名前だったような気がする。

今後の治療方針を聞き、それを母親にメールした後、僕はじいちゃんの部屋に行った。

その頃にはもう、窓から太陽が見えていた。

じいちゃんは、まだ目を覚ましていなかった。なので僕は、じいちゃんのそばのイスに座った。

改めてじいちゃんを見てみると、僕はじいちゃんの顔のしわが増えていくことに気付いた。しかし、体は実年齢よりもはるかに若々しく、とても余命宣告されたとは思えない程だった。

「おお、コータ…すまんのう」一時間ぐらいたった頃、じいちゃんは目を覚まし、起き上がろうとした。

「ああ、いいいいよ、無理しないで。…明日、とりあえず退院できるって」

「ほう、それは良かった。…いつだったかいのう、コータが東京に戻るのは」

「明日だよ。新学期が始まるから」

「そうか、明日か…ありがとのう、コータ。それから…ありがとう」

「えっ？ 何？」

「だって、コータは山口は嫌いじゃろ？」

僕は何も言えなかった。

「それなのに、嫌いなのに、山口へ来てくれて、山口弁を喋ってくれて、はなっこりーをよおけ食べてくれて、…ありがとのう」

全部、知ってたんだ…。

僕は返事する代わりに、訊いた。

「じいちゃんはさ」

「何じゃ」

「じーちゃんは、山口の、どういふところが好きなん？」

「そうじゃな…思い出じゃな」

「思い出？」

「そうじゃ。山口には、コータとの思い出がつまっちよるけえな。早うに父ちゃん亡くして、母ちゃんは忙しゅうて、それでわしがお前さんの相手をやつちよった。小さい頃からずっと。そんな思い出、山口以外の場所には全く無いけえのう」じいちゃんは、続けた。

「じゃけえな、わしは山口が好きじゃ。生きてる限りずっと。ここではなっこりー育てて暮らしやる。どうせ、もう長くはないじゃろうしな」じいちゃんは笑って言った。

そんな事まで、分かてるのか…。

何て答えるのが正解だろう。

僕は考えた。考えに考えて、ようやく言葉を見つけた。

「じいちゃん…明日、東京に戻るんだけどさ」

「分かっちゃる」

「そしたらさ、また、はなっこりー送ってほしいんや。…いいかな？」

じいちゃんは、少しの間僕の顔を見つめてきた。そして、目を細めて笑った。

「もちろんや」

「ぶち美味いの、作ってよ」

「分かっちゃる。よおけ作っちゃるけえ、覚悟しとき」僕とじいちゃんは笑いあった。

東京に戻った次の日には、じいちゃんのはなっこりーを送ってきてくれた。何だか、前よりも量が増えたような気がしたので、僕はケンジに少しだけおすそわけした。ケンジは、その日のうちに「美味しかった」

とメールをしてくれた。

半月に一回のペースでじいちゃんのはなっこりーを送ってくれた。それを料理しているうちに、僕の料理の腕はどんどん上手くなった。

じいちゃんは、天に召される直前まで、送り続けてくれた。

その頃、季節はすっかり冬になっていた。

じいちゃんは、余命よりも半年近く長く生きた。

じいちゃんは、最期まで笑っていた。

二〇二八年・九月一日。

あるローカルニュース番組の新人アナウンサーは、カメラに向かって喋っていた。

「今日の特集は、山口市で今日オープンした料亭『野上』です。『野上』は山口の食材のみを使った料亭で、特にはなっこりーを使った料理は早くも話題を集めています。店主の野上鉦太さんは大学卒業後、東京の料亭で修業を積まれた後に、地元・山口に帰ってきて『野上』を開店されました。それでは、インタビューに行ってきますす！」

佳作

虎の威を借る狐の意を刈る虎

群馬・東京農業大学第二高等学校 三年

松本 美生

あるところに、虎の威を借る狐がいた。狐は虎の後ろをついて回っては、声を潜めて噂し合う他の動物たちに言った。

「あの虎はすごいんだ。僕はその虎に嫌われることも殺されることもなくついて回ってる。僕も大したものだろ？」

言いふらしては得意顔を振りまく。

「くだらないな。」

虎は言った。

「実にくだらない。鬱陶しいからついて来るな」

虎はみんなに聞こえるように唸った。

周りの動物たちが小さくなって茂みに沈んで行く中、狐だけはにこにこしている。

「さすがです。一言でこれほどの貫禄、あなたほどの動物はそうはいないですよ。ついて行けるなんて僕は光栄だ。」

虎は心底この狐が疎ましかった。だが、ふわふわとおだて上げられてのらりくらりと諫められるぬるいやり取りを続けるうちに、いつしか怒る気概さえもなくなっていた。

そうやってついて来る者があるせいかもしれないが、時々虎に話しかけてくるものが現れた。恐る恐る声を震わせながら、上目遣いで話をする奴らも、虎にとっては邪魔で鬱陶しいものでしかなかった。話しかけ

られた腹いせに、虎はこう言うようになった。

「あの陳腐な狐は、しかしなかなか気骨があるんだ。他のものとは違って俺についてこようとする。俺の器を見る目もあるんだな。」

狐はちらりと気まずそうな顔で虎を見た。虎に話しかけた動物は、冷めた目で狐を眺めている。こんな狐がどれほどのものだ、という目だ。虎はあさつての方向を見ながら、むせるように笑った。渴いた笑いには、ざまあみろが織り込まれている。狐はそれに気づいてからというもの、虎のことを吹聴して回るのをやめた。ずる賢い狐は、同時に自分に対する聡明さも持ち合わせていた。

虎について口にしくなると、周りの動物たちの目に、今度は狐が虎のあとをついて回るのが不自然に映るようになった。

虎は時々、狐に視線を投げる。狐が耳を倒し俯いた後ろ頭で答える日々は、すぐに終わった。

ある日突然、狐はついてくるのをやめた。ただ一言、もういいや、ごめんなさいとだけつぶやいて去った。虎は気にも留めなかった。元々そうして欲しかったし、有る事無い事語り草にされるのはいつだって御免だ。狐が自ら去ってくれたことは、この上なく喜ばしいことだった。

いつものように道を歩く。いつものように遠巻きにされて。いつも通りだ。ただ、後ろが限りなく静かなことを除けば。

静かな昼下がりには気持ちいい。静かな道は落ち着く。虎は噛みしめるように、心のうちでそう繰り返した。

動物たちの噂もよく聞こえてくる。どの動物も皆一様に畏れ、賛嘆している。いい気分だ。その気分の中に一つ、飛び込んでくる噂話がある。「あの虎を慕っていた狐はもういないのね。大したことなかったのかしら。あの虎に見切りをつけたのかもしれないね。」

虎はねぐらに潜り込んだ。少し唸ると、反響して大きく聞こえる。岩壁に跳ね返り、外には出ずに内側で消える。虎はそこで

「俺はなんだったのだろう」

とだけつぶやいて、前脚に顔を乗せると、細く高い声でむせび啼き始めた。

口内炎

千葉県立安房高等学校 二年

渡辺 真子

痛い。痛い。どうしてこんなに痛むんだろう？ どこが痛い？ ここが痛い。ああ！ 何も考えられないくらいに痛むんだ！ この痛み、誰かにいえばわかってくれるだろうか？ わかってくれなくても君にだけは伝えたい、伝えておきたい。

痛みがだんだんと辛いものになっていく。痛い、つらい。君に会いたい。君に会えばなんとかなる、気がするけどきつとそんなことはないだろう。くそ、痛みが胸まで伝ってきた。どうしてこんなに痛いんだ？ だって、この痛みは、ただの……

きっかけは自分が作った傷だった。口の中の肉を噛んでしまっただけ。そう、この痛みは口内炎だ。気がつけばぷっくりと口の中にできていたのだ。こんなの、いつか治る。自然治癒が一番だ。と、思っていたのだが、生きていくには食べるが必要になってくるし、食欲、には勝てない。物を食べるとびりり、と痛みが走る。この地味な痛みはびりびりと主張する。まるで、俺はここにいるんだと主張するように。

そりゃあ、口内炎だ。口の中なんて唇を閉じていたら見えない。他人にはわからない。なったヤツにしかわからない。こんなの、理不尽じゃないか。誰か俺の痛みを知ってくれよ。俺以外にも口内炎の奴はこの世界に何万といるかも知れないが、痛い、痛すぎるんだ。どうしてこんな

に痛いんだ？

私は、口内炎だ。この男の口に住んでいる。口内炎だって、出来たくて出来るわけじゃない。この男の私生活、生活習慣が悪いのだ。私のせいではない。

それに、私にだって痛覚はあるのだ。硬いものが当ればびりびりと痛む。冷たいものがくれば体が震える。それがこの男に、まんま伝わるのだ。だから、この男も私に刺激を与えないでほしい。こっちだって痛いんだ。お前だけじゃない。だから、私は痛みを増幅させてやる。この私が出来たことを後悔すればいい。ああ、ドンマイです。ドンマイです。いちいちわめき散らさないで。私もいつまでもいるわけじゃないんだから。そんなに性悪じゃないわ。だから、平気なふりして耐えきってみせてよ。

ああ、痛い。まだ痛い。どうしてこんなに痛いのかわからない。これで病院に行くのも気が引ける。たかが口内炎だぞ？ 恥ずかしすぎていける訳がない。

それに、まだ君は来ない。君に会えない。会いたい。胸がずきずきする。これは本当に口内炎か？ 口内炎が出来てからやけに胸が痛む。口内炎の痛みが胸にきている？ まさか。口内のがん？ 俺はどうすればいいんだ。気がつけばまた大きい口内炎がのさばっている。原因なんて特定できない。俺はもうすぐ死ぬのかもしれない。こんな口内炎のせいだ。だって痛みがひりひりずきずき。ああ、痛みでおかしくなりそうだ！ でも、こんな痛み、黙っていればわからない。涼しい顔してればわからない。君への気持ちも黙っていたら伝わらない。俺以外にはわからない。ん？ 君への、気持ち？ そんなもの、あるはずない。そうだ、ない。今は、この痛みだけ。しかし、こんな痛みのことは恥ずかしいから誰にも告げない。だから叫ばない。波風たてない。死んだっていい。こ

のまま、なんにも、ないままの人生を送るよ。

口内炎の仲間ができた。この口内の持ち主の男はさぞかし痛いだろう。こんな大きい口内炎が出来るなんて。ご愁傷様。この一言につきる。しかも、この男は薬で私たちをなくすつもりはないらしい。あくまでも、我慢。我慢。おかしい人。いまだき、薬局にいけばこんなもの治す薬ぐらい売っているというのに。まあ、そうだね。アナタがこの痛みに耐えれば済むことだからね。そうやって、そうやって、全部全部逃げて、目をそらして、自分をごまかし続けて。本当はわかっているでしょう？ この痛みがこれだけじゃないってことくらい。だからね、優しい私が憐れなアナタにサインを送ってあげるからね。強がりばかりじゃ疲れるでしょう？

ああ、君はまだこない。当たり前か。あんなことを言ってしまったからくるはずもないか。今でも、頭の中で操作して、この痛みも快樂へと導いて。上限もなんも無しにすべて君を知りたくて、君のことならコンプリートしたい。君の怒った顔も、笑った顔も、泣いた顔も全部見てみたい。見たい。見たかった、んだ。さすがに喧嘩して、言い過ぎた。ゲームで言うなら今は詰み状態。前にも後ろにも進めない。何をしたら良いかわからない。猛反省するしかない。

今はただ、ただ頭の中で。過ぎた時間を巻き戻して、成功した良いところだけをスロー再生。そして喧嘩して、君が飛び出したところを俺が捕まえて。この悪い状況を神回避するんだ。今のこの詰み状態に陥らないために。でもこんな単純で、こんな都合の良いこと出来るわけがないんだ。タイムマシンがなくなっちゃ。無理だよ。

痛みだね、この痛みに隠されてるのはなんでしょね？ 無理ならね、無理ならね、ちゃんと助けを求めてね？ 独りよがりなんて、かつこ悪いわ。ひねくれたアナタにはびつたりだけど。

そろそろね、そろそろね。きっと痛みも引いてくるはず。私も、もう一つの口内炎も消えるときが来た。言っただしよう？ いつか消えるって。私の役目もこれで終わり。終わっちゃうのよ。ようやくね、この痛みからカイホウしてあげるからね。でもですね、でもですね。この痛みを、この私を、時々で良いから思い出してほしいからね、忘れたころにまた顔を出してあげる。嬉しいでしょ？ だからね、あんまり調子に乗らずに。ほんの少し口内炎ができないように気をつけていてね。今度、私ができたらとびきり痛くしてあげるから。

あれから痛みはすっかりと消えた。食べても、飲んでも平気になった。口の中を舌で確認してもアイツはもういない。見当たらない。あの辛い痛みはない。もう辛いことはない。もうない、どこにもない。そのはず、なのに。痛みなんて、辛いことなんてどこにもない。ないはず、なのに。もうつらい。なぜこんなに痛い？ 辛い？ この痛みがなくなることをこんなにも望んでいたのに。なんだか、何かが物足りない。俺は、どうして…。

ああ、そうか。俺のこの痛みは、口内炎だけじゃない。きっと、君への気持ちだが、こんなに痛みを発してるんだ。逃げるな、目を背けるな、って。だから、胸が痛いのか。だから、こんなに涙が出るのか。そうか、そうか。だからこんなにいたい、のか。俺は、君に…。

ああ、痛い。胸が痛い。君への気持ちがあふれでてずきずきびりびり。今度はちゃんと気持ちを伝えるからね。大好きな君に。君にだけはちゃんと伝えたいから。俺のほうからサインを送るよ。泣いてばかりじゃ疲れるでしょ？ だから、笑って、待ってて。

※この作品は、E Z F G氏のオリジナル曲「とても痛い 痛がりたい」に着想を得て執筆したものです。

入 選

「追 憶」

三重・日生学園第一高等学校 一年 平野 智也

「落とした心」

茨城・茗溪学園高等学校 一年 荒川 七瀬

「夜明け前」

千葉県立成田国際高等学校 三年 谷口 広樹

「りんごあめ」

広島県立呉三津田高等学校 二年 川本 和美

「水彩少女」

神奈川県・横浜雙葉高等学校 三年 石川真梨菜

「クロ猫」

高知県立中村高等学校 一年 増田 有希

「人 魚」

香川県立丸亀高等学校 三年 都築 幸乃

「闇 猫」

神奈川県・洗足学園高等学校 一年 山上 黎桂

「彼女の顔は」

愛知・愛知啓成高等学校 二年 高橋紫野香